平成１５年度学力向上フロンティア事業中間報告書

都道府県名	青森県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	青森市立荒川中学校					
学　年	１年	２年	３年	特殊学級	計	教員数
学級数	２	２	２	０	６	１２
生徒数	６０	５５	５５	０	１７０	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

主体的に学習に取り組み、学力の向上を目指す生徒を育成するための指導法の研究
－ 生徒の学力の評価を生かした指導の改善 －

２．研究内容と方法

(1)　実施学年・教科

１～３年生　数学（生徒個々の理解度に差が出やすく、本校の実態として学力の向上が更に求められるため）
１～３年生　英語（学校として当該教科に関する研究実績があるため）
１年生　国語（学校として当該教科に関する研究実績があるため）

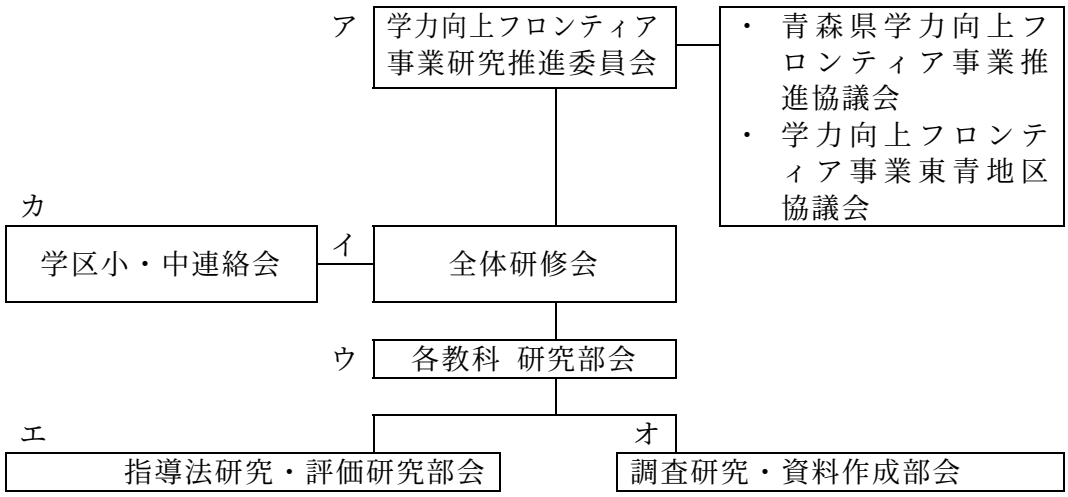
(2)　年次ごとの計画

平成14年度	○テーマ 主体的に学習に取り組む生徒を育成するための指導法の研究 －個に応じた指導の充実を目指して－ ○仮説 生徒の習熟の程度に配慮した指導方法や指導体制の工夫改善を図り、個に応じた指導を充実させることによって、基礎・基本が身に付いた、主体的に学習に取り組む生徒が育つ。 ○研究内容・方法 １　理解や習熟の程度に応じた指導 ２　モジュール学習の実施 ３　小学校との連携指導の導入 ４　個に応じた指導のための教材の開発

平成15年度	○テーマ 主体的に学習に取り組み、学力の向上を目指す生徒を育成するための指導法の研究 －生徒の学力の評価を生かした指導の改善－ ○仮説 生徒の学力を、評価規準・評価基準によって評価すると共に、標準化された学力検査の結果を基に把握し、指導内容・指導方法を工夫することによって、主体的に学習に取り組み確かな学力の向上を目指す生徒が育つ。 ○研究内容・方法 １　理解や習熟の程度に応じた指導 ２　モジュール学習の実施 ３　小学校との連携指導の導入 ４　個に応じた指導のための教材の開発

平成16年度	○テーマ 　主体的に学習に取り組み、学力を向上させる生徒を育成するための指導法の研究 －発展的な学習や補充的な学習など、個に応じた指導のための教材の開発－ ○仮説 　発展的な学習や補充的な学習のための教材を開発し、生徒一人一人の習熟の程度に応じたきめ細かな指導を行うことによって、主体的に学習に取り組む生徒が育ち、確かな学力が向上する。 ○研究内容・方法 　1　理解や習熟の程度に応じた指導 　2　モジュール学習の実施 　3　小学校との連携指導の導入 　4　個に応じた指導のための教材の開発

(3)　研究推進体制



【各組織の構成員及び活動内容等について】

ア　学力向上フロンティア事業研究推進委員会

①　校長、教頭、教務主任、研修主任、学年主任で構成する。

②　活動内容

・青森県教育委員会（東青教育事務所）、青森市教育委員会からの指示、連絡、指導に関すること
・事業の経費に関すること
・青森県学力向上推進協議会及び東青地区協議会に関すること
・本校における研究事業計画の構想及び推進に関すること
・学区小学校及び地区指定校との連携に関すること
・関係団体の視察訪問及び外部への説明に関すること
・（イ）～（オ）の組織の指導及び活動の連絡調整に関すること
・研究発表の計画、実施に関すること

イ　全体研修会

①　本校教職員を主体とした研修会とし、必要に応じて他校教職員を加える。

②　青森県教育委員会、又は青森市教育委員会の指導助言を受ける。

③　研修会の開催は別紙計画による。

ウ　各教科研究部会

①　教科担当者全員で構成する。但し、美術科、家庭科は除く。

②　各教科の授業を通して事業に係わる研究を進める。
③　(エ)並びに(オ)の部会の研究に基づく実践を進める。

エ　指導法研究・評価研究部会
①　国語科、数学科、英語科の担当者で構成する。
②　次に係わる指導法研究を進め、成果・問題点・対応策等を明らかにする。
・ＴＴによる授業
・モジュールによる授業
・選択教科における習熟度別（コース別）学習
③　補充的、発展的学習に係わる研究を進める。
・フロンティアタイムへの取り組み
・英語検定、漢字検定、数学検定への取り組み
④　学力検査の分析結果の活用に係わる研究を進める。
・ＣＲＴ、ＮＲＴ、県下一斉学習状況調査（９月４日：２学年）
⑤　学習相談室（数学質問コーナー）の活用について検討する。

オ　調査研究、資料作成部会
①　社会・理科・音楽・体育・技術の担当者で構成する。
②　次の調査、分析、考察をする。
・生徒の学習の実態
・学力検査（ＣＲＴ、ＮＲＴ）
・その他、研究推進に必要な調査
③　次の資料を収集、整理、作成する。
・評価に関すること（自己評価、相互評価、その他の評価）
・家庭学習の手引き
・研究の記録（研究紀要、教材研究の記録、実践研究の記録）
・「学力向上フロンティアスクール」指定校の研究資料等

カ　学区小中連絡会
①　荒川小学校、荒川中学校の校長、教頭、教務主任、研修主任で構成する。必要に応じて、関係職員を加える。
②　小中学校の連携に係わる計画の作成、及び事業の推進を行う。

(4)　実践研究の内容

ア　個に応じた指導充実のための指導方法・指導体制の工夫改善
①　ＴＴの実施
＜１年生数学・英語（クラスあたり各２単位時間）＞
英語科は２名の英語科教師と年５回のＡＬＴによる。
数学科は音楽科教師によるＴＴで実施。
＜２年生数学・英語（クラスあたり各２単位時間）＞
英語科は２名の英語科教師と年５回のＡＬＴによる。
数学科は数学科教師によるＴＴと音楽科教師によるＴＴで実施。
＜３年生数学・英語（クラスあたり１単位時間）＞
数学科は数学科教師によるＴＴ、英語科は２名の英語科教師とＡＬＴによる。
②　選択教科におけるコース設定
選択英語において、次の２コースを設定した。
＜１年生・２年生（リスニングコース、スピーチコース）＞
１年生は年間３０時間、２年生は年間３５時間を計画。英語科教師による。
＜３年生（チャレンジコース、マスターコース）＞
年間３５時間を計画。英語科教師による。
選択数学において次の２コースを設定した。

＜３年生（ベイシックコース、オプショナルコース）＞
年間３５時間を計画。数学科教師による。

③　１単位時間の弾力的な運用（モジュール学習）の実施
１年生国語と英語をそれぞれ２５分間で行う時間を週２回実施した。これと１年生選択英語を組合せ、生徒は週５日の毎日国語と英語の学習の機会を持つ。基本的な時間割に組み込み、通年で実施。

イ　学びの機会の充実と教材の開発
「フロンティアタイム」の実施
教科：数学
内容：級別の検定問題と練習問題を作成し、級別の練習問題を使った学習の後に級別の検定を実施し、上位の級の合格を目指させる。
昨年使用の教材を見直し、学年別・級別問題を分野別・級別問題とした。さらに、各練習問題は、各級ごとに３種類の問題を用意した。
時間：帰り学活前の１５分間。
生徒の編制：クラスを解体し１年生２クラスを４グループ、２年生２クラスを４グループ、３年生２クラスを３グループ。
（１年生は九九、２年生は正負の問題、３年生は校内一斉テストの成績を基準とした。）

ウ　生徒の学力の評価を生かした指導の改善
標準化された学力検査を年２回実施。４月１０日教研式全国標準診断的学力検査（ＮＲＴ)、９月４日学習状況調査(県教委実施)、２月６日教研式標準学力検査（ＣＲＴ）を実施した。この結果を教科指導の重点事項に生かす。
・学力検査の分析結果を生かした年間指導計画の見直し
・学習の成果や進歩の状況を積極的に評価できる評価方法の工夫
・学習意欲を高める評価活動（自己評価、相互評価等）の工夫

エ　小中連携での授業研究の実施。
・中学校教師２名と小学校教師１名による中学校でのＴＴ授業と協議。
・小学校教師２名と中学校教師１名による小学校でのＴＴ授業と協議。

Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

ア　指導方法と指導体制

①　ＴＴによる指導
英語科がこれまで取り組んできた経験を生かし、会話練習に重点を置いた授業を展開した結果、物事を英語をとおして見る態度や考える態度が身に付いてきた。
数学科では、ＴＴの授業をとおして、個々の生徒への机間指導や個別指導を中心に実施した。その結果、授業者一人では、とらえることができない個々の生徒の実態がより適切に把握でき、補充的学習、または発展的な学習における個別指導として有効であった。

②　選択教科のコース設定
２クラスを解体し、国語１コース、数学２コース、計３コース編制による習熟度に対応した授業を展開した。補充的な学習と発展的な学習を展開した結果、生徒の学習意欲の向上と基礎・基本の定着に効果があった。

③　モジュール学習
国語科と英語科で各２５分、計５０分の組合せで実施した。生徒は楽しみながら取り組み、教科書以外の教材も取り入れたことで問題の種類を多くできたことや基礎・基本の定着を図る上で、有効であった。

イ　学びの機会の拡充と教材の開発

「フロンティアタイム」の実施にあたって、教材として級別の検定問題、練習問題を作成した。生徒が現在の学力に合った問題を解くことで、努力に応じた学習結果が見いだせることで、学習意欲の向上とともに、計算技能の向上など、基礎・基本の確かな定着に効果があった。

ウ　学力の評価を生かした指導の改善

①　標準学力検査（ＮＲＴ、ＣＲＴ）

標準学力検査による分析は、昨年度との比較をすることで今年度の取り組みに生かすことができた。また、結果を出身小学校別に整理することで、小・中連携での授業改善に生かすことができた。

ＣＲＴ検査については年度末に実施したことで、今年度の到達度を評価できた。また、前年度と比較することで、生徒一人一人の到達度の推移状況を明らかにできた。

②　標準学力検査の結果を反映させたフロンティアタイムの実施

学力検査の結果をもとに、各学年生徒を３または４のグループに分けて級別の練習問題を用いた個別指導を実施した。

③　「家庭学習のてびき」を作成

６月９日(月)に「勉強に対する意識調査」を実施。生徒の学習環境と意識調査をもとに家庭学習のためのてびきを作成した。

２．今後の課題

ア　指導方法と指導体制

①　ＴＴによる指導

数学科では、個々の生徒への机間指導を中心として実施したが、ＴＴによる一斉授業の形態以外に、習熟度別グループ編制による少人数指導の方法も考える必要がある。また、一斉授業においてもＴＴの多様な指導を工夫する必要がある。

②　選択教科のコース設定

２クラスを解体し、２コース編制をした教科では、習熟度に対応した授業を展開したが、効果があまり見られなかった。２クラスを３コースにすることでさらに効果的になると考えられる。

③　モジュール学習

２５分で教科が入れ替わることに抵抗を感じる生徒も多い。

イ　学びの機会の拡充

「フロンティアタイム」の実施にあたって、級別の検定問題、練習問題を作成し使用したが、問題の妥当性、解答時間の設定などを検討し、さらに改善していく必要がある。

ウ　学力の評価を生かした指導の改善

①　標準学力検査（ＮＲＴ、ＣＲＴ）

ＮＲＴは、年度内における変容として把握、分析できないので、次年度の研究計画に反映させることが困難である。ＣＲＴ検査については年度末に実施して到達度を評価することで、当年度の到達の度合いは確認できるが、学習内容のちがう次年度の学習と関連付けることはむずかしい。

②　自己評価

市教委の指導課学校訪問で、生徒の自己評価について検討したが、自己評価させる場面や教科により、評価のさせ方を工夫していく必要がある。

Ⅳ　学力把握のための学校としての取組

標準化された学力検査を年２回実施した。
　・４月１０(木)日教研式全国標準診断的学力検査（ＮＲＴ）
　・２月６日(金)教研式標準学力検査（ＣＲＴ）を実施した。
学習状況調査(県教育委員会義務教育課 主催)を実施（９月４日、５日)
　・学力検査
　・質問調査（学習に関する意識調査・環境調査等）
　　この結果を教科指導の重点事項に生かすこととした。

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

・平成１５年５月２２日(木)東青管内小・中学校教務主任研究協議会で発表。
・平成１５年７月９日(水)岩手県滝沢村教育委員会管外研修の学校訪問で概要説明。
・平成１５年８月１２日(火)平成１５年度東青管内中学校教育課程地区研究集会全体会で発表。
・平成１５年１０月２４日(金)平成１５年度第２回学力向上フロンティア事業推進協議会で発表。
・平成１５年１１月２１日(金)岩手県西根町小中学校教員研修学校訪問で概要説明。
・平成１５年１１月２７日(木)栃木県芳賀郡益子町立小中学校長会県外教育事情視察研修の学校訪問で概要説明。
・平成１６年２月２３日(月)北海道江差市立江差北中学校教員研修学校訪問で概要説明。

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　☐１５年度からの新規校　☑１４年度からの継続校

【学校規模】　☐３学級以下　☑４～６学級
☐７～９学級　☐１０～１２学級
☐１３～１５学級　☐１６学級以上

【指導体制】　☐少人数指導　☑ＴＴによる指導
☐その他

【研究教科】　☑国語　☐社会　☑数学　☐理科
☑外国語　☐音楽　☐美術　☐技術・家庭
☐保健体育　☐その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　☑有　☐無